

2013年 11月 3日

公益財団法人 笹川記念保健協力財団
理事長 喜多悦子 殿

所属機関・職名

医療法人 社団愛友会
上尾中央総合病院

緩和ケア認定看護師

研修者氏名 竹波 純子



2013年度日本財団ホスピスナースネットワーク会員に対する海外研修助成
研修報告書の提出について

標記について、下記のとおり報告いたします。

記

1. 研修課題

- ・緩和ケアを提供している施設内での異職種間の連携体制、地域（在宅やサービス提供施設、緩和ケアセンターなど）での連携体制と看護師が果たしている役割について学ぶ
- ・オーストラリアでの緩和ケアに対する考え方について学ぶ

2. 研修期間 2013年9月7日～2013年9月15日（9日間）

3. 研修先

「研修名：デーケン先生と行くオーストラリア ホスピス視察研修2013」

4. 研修報告書

別紙（正1部、副3部）

（注 研修報告書はA4判横書き）

I 本研修の成果：学んだこと、今後役立つと思う点について

オーストラリアでは、高齢者対策という国策として緩和ケアの提供を推進している。従って、対象年齢を問わず「老い」や「死」に対する教育の機会が設けられ、人が避けられない「死」に向う過程の中で症状を緩和したり、その人らしく生きることを支えることの大切さについて、緩和ケアを通じた啓蒙活動が熱心に行われていた。

また、国費を投じてグリーフについての研究センターを置くなど、グリーフやストレスが健康を害する大きな要因であることに目を向け、自殺やうつ病、その他疾病の予防策としての保健活動にもそれが活かされていた。このような考え方や活動は、国から州、各コミュニティを通じて（移民や原住民などの言語、文化の違う人々も含めたオーストラリアの人々）隅々まで浸透させるよう努力されており、緩和ケアが死に直面している人々やその家族だけでなく、現在も健康である人々がより良く生きるためにも必要なものであるという考え方を学ぶことができた。

このような背景で、緩和ケアの中心的部分である「喪失」による体験が患者やその家族に及ぼす影響について、それぞれの立場で関わる人々が熟知しているだけではなく、それぞれの場面においてどのような形でサービス提供が適切であるか、どのようにケアしていくかについても確立されていると感じた。ケアやサービスの提供の場では、異なるそれぞれの職種がスペシャリストとして一人の患者や家族と向き合い、各々の役割を果たしており、特に地域の中では専門的な知識を持った看護師がその連携の中心的な役割を果たしているということも学んだ。

早い時期から、高齢化社会を見通して国策として緩和ケアを取り入れ、保健活動として行ってきたオーストラリアと日本の煩雑な医療、介護に対するシステムとの違いがある。そのため、オーストラリアのように老いや難病者も含めた終末期としての包括的なサービス提供をすることは我が国では難しいと思われる。しかしながら、このような考え方や視点を取り入れて、緩和ケアについての教育・啓蒙活動を浸透させていくことは、我が国においても非常に重要な点であると考えられる。その上では、やはり地域における緩和ケアの教育やサービス提供を実践していく拠点に目を向け、その質と機会を向上させるような活動を病院などの既実践している場から発信していく必要があるということ強く感じた。

これらの緩和ケアの捉え方や視点、対象観、多職種の連携体制などのオーストラリアでの学びは、病院施設の中にいる私たちが、今後地域の一員としてすべきことを模索し実行するという上で大きく役立つことであると思う。

II 今後の課題等

日本では、医療と介護（医療と福祉）という別の体勢から一人の人間をケアしており、利用者にとって非常に分かりにくい体制の中でサービスの提供がなされている。また、高齢者対策ではなくがん対策としての緩和ケアという、オーストラリアでは異なる背景があり、緩和ケアは限られた人に提供されるケアとしての認識が根強い。このような体制を個々を変えていくことはできない。

しかし、緩和ケアが全人的な苦痛にアプローチしていくケアであるということとをまず、現在緩和ケアを実践しているひとり一人が認識し、一人でも多くの

人々に発信していくことは重要である。緩和ケアの持つ可能性について、もう一度改めて考えていく機会をどのように作っていくかが今後の課題である。

Ⅲ 本研修助成についての改善点及び当財団へ対するご意見ご要望など

本研修の助成を頂き、素晴らしい見聞を得られたことを感謝いたします。オーストラリアの実践している緩和ケアやその捉え方を知ることだけでなく、デーケン先生の日々のレクチャーも大変勉強になりました。

日々、仕事に埋没されているために自分の視線が狭い所に留まりがちなので今後もこのような機会を作っていただけるとありがたいです。特に生活者として助成を頂けることは、このような機会を現実のものとするに当たり、非常に力になりました。改めてお礼申し上げます。